「金属工学入門」および 「金属を知る」出版の周辺

西 川 精 一*

私が「金属工学入門」を出版したのは1985年5月31日であるが、これは私の停年退官後約5年たってからである。

現役を離れて5年もすると、身のまわりの反故の整理でしようかと考えるのが一般的であるようだ。私も家の裏庭にある書庫の中に山積みされた書類の整理を思い立ったのもその頃である。

最初は捨てる積もりではうり出した書類の山を、唯茫然と眺めるだけであったが、捨てるにしても少し整理をしてからと並べ直してみると、意外に捨てがたい一連の流れのようなもののあるのに気が付いた。

一色貞文先生の講義に出てくる状態図、特に鉄の状態図には悩まされた。応化の故菊池先生のエントロピーもその一つであった。

一人の冶金学徒がたどった歴史にすぎないが、金属の基礎、鉄鋼材料、非鉄金属材料の3部作として、後進学生の役にも立ちそうだという気分が湧いてきた。

その頃私の学友であった故長崎誠三君が、アグネ技術センターという出版会社を始めた頃でもあったので、彼がさっそく出版を引き受けてくれた。

長い原稿の整理には多くの人々が悩まされたいが、「金属工学入門」というかなり部厚い3部作が世に出ることになった。

当時健在だった故橋口隆吉先生のお目にもとまったらしく、青山の学会会議の建物の近くにある地下鉄乃木坂の階段で、「西川君あの書物もう少し軽くないかな……」と御言葉をいただいたこともあった。

以上のような歴史の流れの中で、「金属工学入門」の要約的なものを考えていたが、丸善出版のはからいで、平成7年7月に「金属を知る」という約100頁の本を世に送ることが出来るようになった。割合いに評判がよいらしく、平成11年には第3刷発行にこぎつけた。丸善書店の話では、その後「……を知る」シリーズが続いているらしい。

捨てようと思った反故紙を集めたものが、意外にも評判のよい出版物に化けてしまったのには、今更ながら感慨の深いものがある。

最近東京大学工学部マテリアル工学科から「自己評価、外部評価報告書」という厚い出版物をいただいた。現役で新しい大学のあり方に苦しんでおられる様子がよくわかります。

材料を金属、セラミックス、プラスチックの3分野に大別して、大きくマテリアルという言葉で置きかえておられるのはよく理解できるが、「冶金」とか「金属工学」という言葉が、工学部の学科名から姿を消してしまう傾向にあるのは何か不自然なような気がする。金属のことは、実際に金属にさわってみないと理解できないのではないのでしょうか。

* 東京大学名誉教授
The Surroundings of The Publication of 「Metals and Alloys」 and Its Short Abstract; Seiichi Nishikawa (Emeritus Professor, Tokyo University)
Keywords: my starting and standing points
2000年5月8日受理